

令和元年6月14日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01989

研究課題名(和文)隣接分野との比較照合を通じたメタ形而上学的構図の再編成

研究課題名(英文) Reorganization of the metaphysical landscape through comparison with adjacent fields

研究代表者

井頭 昌彦 (Igashira, Masahiko)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：70533321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間全体の成果としては、科学的实在論論争とメタ形而上学論争との間の平行関係、およびそれぞれの内部で展開されてきた議論の援用可能性を確立できたことがまず挙げられる。また、現在もっとも有望な存在論的立場とされる物理主義に関して、それが哲学的自然主義を前提とせざるをえないこと、またそのことを一つの理由として形而上学的实在論の形では主張できないことを明らかにしたことは大きな成果であり、実際、この結果を受けてさらなる発展的な研究課題が創出可能になる。例えば、唯一残された形態であるデフレ主義的物理主義についてその解明と是非評価を進める、という従来にない課題が重要なものとしてクロースアップされるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

形而上学は、世界には何が存在しており、それはどのような構造を持つか、といった問題を扱う。この問いに答えるためにどのような方法論がありえ、またどこまでのことがなしうるかという「メタ形而上学的問題」においては研究者たちの意見に収束が見られてこなかった。これに対して本研究では、主として自然科学に見られる方法論的議論を参照しながら、メタ形而上学的問いに対して部分的に答えつつ、幾つかの立場が擁護不能であることを示した。そうした立場の一つが、現在最も説得的なものと考えられている形而上学的实在論タイプの物理主義、つまり我々の認識から独立した世界それ自体が物理学的な事実のみで成り立っている、とする考えである。

研究成果の概要(英文)：The first achievement of the research as a whole was the establishment of the parallel relationship between the scientific realism dispute and the meta-metaphysical debate, and the possibility of invoking the arguments developed within each research area. Also, it is a great achievement that it is necessary for physicalists to presuppose the philosophical naturalism, and that physicalism cannot be asserted in the form of metaphysical realism. In fact, further development researches become possible based on this result. For example, the unprecedented task of clarifying and evaluating "the deflationary type of physicalism" as the only possible form of this position will be highlighted as important.

研究分野：Philosophy

キーワード：meta-metaphysics philosophy of science

1. 研究開始当初の背景

分析哲学の手法を用いて形而上学的問題を論ずる「分析形而上学」という分野は、近年、分析哲学においてもっとも勢いのある研究領域であり、因果性・様相・存在論といった形而上学的主題それぞれについて、21世紀以降においてもなお多く研究成果が公刊され続けている。他方で、研究成果が蓄積され分野として輪郭が定まってくるに従って、分析形而上学研究において採用されている基本前提や方法論に対する批判的検討(メタ形而上学)も行われるようになった。こうした研究の重要な成果として、分析形而上学者達による自己吟味を主軸とする Chalmers et al. (2009) が有名であるが、その後、形而上学の外部から批判が徐々に増えてくる。たとえば、哲学的自然主義/科学哲学からの批判である Ladyman et al. (2007) や Ross et al. (2013)、プラグマティズムを基軸とする批判を展開する Price (2013) などが典型であるが、こうした事例からも示されるように、形而上学内外を問わず論争は現在も継続中である。

さて、こうしたメタ形而上学に関する論争において中心的な争点となっているのは、主流派分析形而上学者が採用する形而上学的实在論の是非である。この立場は「形而上学的主張が正しいとはどういうことか?」という問いに対して《我々の認識や概念から独立した实在を正しく写し取っていることだ》と答えるものであるが、この立場に対して「そのような表象主義的構図は維持できない」(プラグマティスト)、「実際に形而上学者たちが提示する知見は科学的事実と相容れない」(科学哲学者)といった批判が提示される、というのがしばしば見られる対立軸である。

もちろん、形而上学的实在論に対して、Kant、Peirce、Dewey、Quine、Putnam、Laudan 等による強力な反論がすでに存在していることは周知の事実であり、分析形而上学者達もそういった議論蓄積を無視して独断的にこの立場を奉じているわけではない(実際、従来型の批判の問題点を指摘し、形而上学的实在論を改めて擁護する試みとして Lowe (2002)、Loux (2006)などが挙げられる)。しかし、研究代表者が見る限り、形而上学的实在論に対する新規擁護論を詳細に吟味した上での实在論批判はほぼ存在しないし、また逆に、形而上学者側の擁護論自体も(科学哲学や認識論など)隣接分野における議論蓄積に対する見落としがあるため十分な応答になっているとは言えない。つまり、現状では、専門分化が進みすぎたこともあり、擁護論者と批判者との間で基本前提の擦り合わせや意見交換が十分にできていないという実態が存在すると考えられるのである。

2. 研究の目的

メタ形而上学的構図、すなわち形而上学研究がその下で遂行されるべき基本枠組の整備という目的を追求する上で、本研究をリードする問いは以下2つになる。

- (1) 形而上学的主張が正しいとはどういうことか。
- (2) 正しい形而上学的見解に到達するためにどのような認識的アプローチをとるべきか。(到達/接近できているかを判断するための妥当性評価基準は何か。)

もちろん、これら2つの問いは密接に関連しており独立に取り組むことができない。たとえば、形而上学方法論に関する(2)の問いに対して近年形而上学者達から提示されている《単純性》《儉約性》《常識的直観と合致》といった指針であるが、これらを重視する理論構築方法が妥当なものであるか否かは、これらの指針が(1)で設定された目的実現に資するか否かで判断されることになるだろう。逆に、(1)の問いへの回答は、我々が決してそこに到達しないし接近できないような仕方では形而上学的真理を規定するものであってはならないはずである。

この相互関連により(1)と(2)への回答の説得的な組み合わせをある程度絞り込むことができるが、これに加えて、隣接分野における議論蓄積の援用によりさらなる絞り込みが可能となる。具体的に、科学的实在論論争(科学哲学)、哲学的自然主義およびプラグマティズムの説得的な形態を巡る論争(メタ哲学)、真理論上の論争史などを参照することで、現行において「生きている」とされる組み合わせを幾つかを排除できると考えられる。こうして、説得性を維持しうるメタ形而上学的立場の範囲を絞り込みつつ、メタ形而上学的論争の対立軸を再編成すること、これが本研究の具体的な目的となる。

3. 研究の方法

本研究では、隣接諸分野の研究蓄積を援用することで、説得的なメタ形而上学的立場の絞り込みを試みる。この目的を達成するために、以下3つのテーマを軸に研究を推進する。

- (1) サーベイにより、現行で「生きている」とされるメタ形而上学的立場をリスト化する。

- (2) 科学的事実論論争とメタ形而上学的論争 比較照合を行い、科学哲学の議論蓄積を形而上学的議論に援用できるよう、議論枠組の共有をはかる。
- (3) 真理論上の論点整理と、そのもとでの形而上学的世界描像の彫琢を行う。

4. 研究成果

研究期間全体の成果としては、科学的事実論論争とメタ形而上学論争との間の平行関係、およびそれぞれの内部で展開されてきた議論の援用可能性を確立できたことがまず挙げられる。

この点については、雑誌論文の にその知見の一部が掲載されている。そこでは、テイラーとドレイファスがごく最近の学術書で展開する「多元的で頑強な事実論」が検討対象とされ、その「頑健な」の部分がメタ形而上学的事実論と理解されるべきこと、そして科学に限定せず様々な言説領域に関してこの強い事実論が主張されていることを確認した。その上で、彼らの議論が、「接触説」と呼ばれる現象学由来の考えと、科学的事実論に対する擁護論証の一部を組み合わせて展開されていることを明らかにした。しかし、研究代表者の考えでは、接触説は科学的事実論を構成する諸テーゼのうちの一つ（世界の独立存在）を擁護できる可能性はあるものの、彼らが参照する科学的事実論擁護論証は取り立てて説得的であるとはいえず、また科学以外の諸言説には援用できない。したがって、彼らの議論には説得性がなく、別の擁護論証を追加するか、さもなければ擁護する立場の方向転換を余儀なくされる、と結論した。

この一連の議論が示しているのは、メタ形而上学的事実論の考えと、科学的事実論を構成する存在論・認識論・意味論の3側面のうちの前2者とが概ね同一視できるという理解であり、したがって、科学的事実論論争における豊富な議論蓄積がメタ形而上学的事実論の是非を判断する際に大いに利用できるという事実である。この議論は、メタ形而上学論争と科学的事実論論争の構造的類似性と知見の相互援用可能性という本研究の成果を、具体的立場の検証を通じて例示するものとなっている。

研究期間全体の成果として次に挙げられるのは、現在もっとも有望な存在論的立場とされる物理主義に関して、それが哲学的自然主義を前提とせざるをえないこと、またそのことを一つの理由として形而上学的事実論の形では主張できないことを明らかにしたことである。実際、この結果を受けてさらなる発展的な研究課題が創出可能になる。例えば、唯一残された形態であるデフレ主義的物理主義についてその解明と是非評価を進める、という従来にない課題が重要なものとしてクローズアップされるだろう。

この点については、雑誌論文の で部分的に成果が報告された上で、学会発表の およびにおいて専門家たちの前で報告された。学会発表の および については、その一部が日本およびドイツの出版社から出版される論文集に掲載されることが決まっており、また別の一部については専門学術雑誌に投稿予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

村田純一, 荒畑靖宏, 井頭昌彦, 植村玄輝, 「ワークショップ報告『媒介論的描像を抜け出して多元的事実論へ』—ドレイファスとテイラーの現象学」, 『現象学年報』第33号, pp. 27-34, 査読なし, 2017.

井頭昌彦, 「哲学的自然主義の内と外」『現代思想 総特集◎分析哲学』2017年12月号, pp. 186-206, 青土社, 査読なし, 2017.

〔学会発表〕(計 7 件)

Igashira, M., “Against metaphysically realistic Physicalism” (invited), *Nature, Technology and Science*, 2019.

井頭昌彦, 「形而上学的事実論タイプの物理主義を論難する」, 一橋哲学・社会思想学会, 2019.

井頭昌彦, 「哲学的自然主義とは何か」(招待講演), ショーペンハウアー学会(ニーチェ・セミナー), 2018.

井頭昌彦, 「心を持ったロボット」は(どうやれば)つくれるか?」(招待講演), 一橋フォーラム, 2016.

井頭昌彦, 「外部問題はすでに自然化されている—メタ存在論的デフレ主義と自然主義の関係」, KNS ネットワーク研究会(東北大学大学院文学研究科 哲学・倫理学研究室 主催), 2016.

井頭昌彦, 「多元論的で頑強な事実論には(どの程度)見込みがあるのか?」, 日本現象学

会・公募ワークショップ「媒介論的描像を抜け出して多元的实在論へ——ドレイファスとテイラーの現象学」, 2016.
井頭昌彦, 「哲学的自然主義は何を排除するのか?」, 日本科学哲学会・ワークショップ「哲学的主義のメタ哲学的評価」, 2016.

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。